

国立民族学博物館の収蔵品⑱

食文化のグローバル・ヒストリーと展示



サトウキビ搾り機



アメリカ大陸原産の多様な作物（現物およびレプリカ）

昨今、歴史学や教育の場においてグローバル・ヒストリーへの関心が高まっている。歴史を国や狭い地域内で完結させることなく、地球規模の視野から、地域間の相互作用として捉える立場である。私の専門であるラテンアメリカでいえば、スペイン、ポルトガルなどのヨーロッパ諸国がインカやアステカなどの文明を征服した大航海時代（十五世紀半ば〜十七世紀半ば）や、異文化間の融合が始まる植民地時代、そして融合してできたものを今や自らの文化として受け入れる現代を考えると、欠かせない視点である。

国立民族学博物館のアメリカ展示場では、このグローバル・ヒストリーを展示から読み取ることができる。たとえば「食べる」のコーナーには、巨大な木製のサトウキビ搾り機が置かれている。たしかにサトウキビは、征服後に旧大陸から持ち込まれたものだが、現在、世界最大の生産国はブラジルであり、その蒸留酒はラテンアメリカ中で飲まれている。もはや

ラテンアメリカの伝統的作物といっても過言ではない。しかし、その伝統の歴史的背景には、ヨーロッパとアフリカ、そしてアメリカ大陸間で成立した奴隷貿易や、三角貿易が横たわる。ヨーロッパ人は、西アフリカで織物や砂糖などの物資、そして武器を売って奴隷を入手し、ブラジルや北米に送り込んだ。奴隷となったアフリカ系の人々がサトウキビや綿花の栽培で酷使されたことは有名である。

このようにアメリカ大陸が、ヨーロッパ人による抑圧の場となったことはまちがいない。しかしベクトルは決して一方に作用したわけではない。展示場には、ドイツ料理と聞くとすぐに頭に浮かぶジャガイモや、イタリア料理の代名詞となっているトマト、そしてわが国でも焼き芋で有名なサツマイモの現物や精巧なレプリカが飾られている。いずれも南米のアンデス地帯に起源を持ち、世界に広がった。また十九世紀半ばのアイルランドの大飢饉の原因はジャガイモの伝染病であり、逆に、わが国の江戸時代の飢饉を救ったのはサツマイモであった。

メキシコ高原で栽培化されたトウモロコシは、今やガソリンに代わるエタノール燃料の材料にも用いられる。見方を変えれば、アメリカ大陸起源の作物は、西欧社会の食文化を席巻しただけでなく、社会を揺るがす要因ともなってきたのである。

そして、こうした作物の起源は、マヤ、アステカに代表される中米のメソアメリカ文明、そしてインカに代表される南米のアンデス文明といった古代文明に求められるのである。その意味で、地球規模という水平方向ばかりでなく、古代文明まで射程に入れた垂直方向、すなわち時間軸への関心を高めれば、グローバル・ヒストリーの楽しさや研究の可能性は無限に広がっていく。そのダイナミズムを感じることで、できる日本で唯一の展示として、学校教育などに是非活用してほしい。（関雄一）